

小学校から中学校への移行期における友人関係

Peer-relation and Friendship in Transition from Elementary School to Junior High School

松 壽 洋 子

MATSUZAKI, Yoko

1. 問 題

近年、学校に不適應を起こす子どもが増えている。「中1ギャップ」とも言われているように、小学校では特別に問題はなかったにもかかわらず、中学校入学後に不登校などの不適應行動がみられる子どもが増加している(文部科学省、2008)。

不登校の生徒は、平成19年度小学校で7,132,874人中23,926人(0.34%)、中学校では3,624,113人中105,328人(2.91%)であった。学年が上がるにつれて不登校の児童生徒は増加しており、特に小学校6年生では8,145人であるのに対して、中学校1年生は25,120人と小学校から中学校へ移行する時に不登校が著しく増加している。

不登校となったきっかけと考えられる状況は、「本人に関わる問題」を除くと、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が小学校2,868人(12.0%)、中学校20,863人(19.8%)と最も多い。児童期から青年期の児童・生徒はいわゆる「思春期」と呼ばれる年齢にあたり、自己や他者に対する認識が急激に変化する(山本&Wapner, 1992)。中学生になると、家庭で過ごす時間よりも学校で過ごす時間が長く

なる。そのため、親など大人との結びつきが強い時期から、次第に友人との関係が大きな位置を占める時期へと変化していく。友人関係は、親子関係や教師-生徒関係とは異なり、子ども同士の対等な関係である。学校への適應が悪い子どもたちは、学校移行期に望ましい友人関係を築くことができないようだ。

学校不適應の問題は、自己と他者の関係の発達と、小中学校のシステムの双方が要因であると考えられる。これまで児童期・青年期の友人関係についての研究は多くなされているが、小中学校の校種違いと友人関係の関わりについて扱った研究はみられない。

そこで本研究では、まず小学校と中学校の環境の違いと学校における適應についての研究を概観する。次に、学校における仲間関係についてなされた研究を取り上げ、小中移行期における友人関係の特徴と問題点を、主に同性の友人を対象にして明らかにする。同年齢の子どもの関わりは「仲間関係」ともいわれるが、本研究では単に一緒に過ごす「仲間」ではなく心理的な結びつきをもった「友人」として扱い、「友人関係」の用語を用いることにする。最後に、近年増加している小中の一貫教育や連携教育が友人関係に及ぼす影響に

キーワード：友人関係、移行、小学校、中学校

Key words : friendship, transition, elementary school, junior high school

ついで言及する。

2. 小学校と中学校環境の相違

小学校と中学校では、学校環境の違いが大きい。小学校は、6歳から12歳までという年齢範囲の広い子どもたちが通う学校である。中学校に比べて校区が小さく、地域との結びつきも強い。主として学級担任制であり、教師と児童の距離が近く、子どもたちは比較的自由な雰囲気の中で学習活動をおこなっている。

それに対して中学校は、3年間の課程であり、小学校に比べて年齢範囲は小さい集団であるが、通常小学校に比べて生徒数の規模は大きい。また、教科担任制であり、学級担任はいるものの小学校に比べて教師と子どもと一緒に勉強したり、活動したりする時間は少ない。さらに教科はカリキュラムが細分化されている。そのため、子どもの匿名性が高くなり、個々の子どもの認知は低くなる（Blythら, 1978; Blythら, 1983; Fenzel & Blyth, 1986など）。アメリカにおける研究では、中学校では教師との相互作用が少ないという結果がみられている（Feldlauferら, 1988）。

3. 小中学校移行時期における子どもの特徴

（1）適応感、態度、ストレスと不安

子どもは中学入学に伴って、学校生活への適応感や、自己報告による態度、行動は大きく変化する。耳塚ら（1983）によると、教師との関係を中心として、中学1年の前半で好転するが、その後の適応過程は悪化する傾向が見られた。日本の小学6年生では「早く中学生になりたい」が45.9%であるのに対して、「小学生のままでいたい」37.2%、「幼稚園の頃

に戻りたい」16.9%と中学校生活に不安を持っている様子がうかがわれる。

中学入学を望まない理由は、「勉強の難しさ」「現在の友人との別れ」「規則の厳しさ」「先輩・後輩の区別の煩わしさ」であり、いじめ・登校拒否の出現率も中学の方が多かった。日本においては、いつまでも子どものままでいたいと思っている子どもが多く、自立を巡る発達上の問題の可能性もある。

さらに、中学校生活について種々のストレスや不安を感じている子どもにとっては、学力が学校適応に重要な意味を持つわけではない（Eliasら, 1985; 山口, 1986）。Youngman（1978）は、適応過程の類型を中学入学前後に測定したいくつかの測度に基づいて6つの類型に分類しているが、その中で特に注意を要するのは「幻滅群（disenchanted）」と「不安群（worried）」である。「幻滅群」の子ども達は、能力は比較的高いのに適応度が低く、自己概念が低い。また、「不安群」の子ども達は、能力が低く不安も強くて自己概念が低い。これらの群の子どもは、継続的に慎重に見守る必要があるだろう。

（2）自己概念

中学入学に伴って自己に対する認知がどのように変化するのかについては、一致した研究の結果は得られていない。移行期には自尊心の変化が大きく、低下がみられたという研究（Eccles & Midgley, 1989）がある。その一方で、自己の能力に対する評価は変化しないという研究もある（Harter, 1982）。小学校と中学校の環境の違いは、社会的比較や競争をより強調する（Harter, 2006）。これらの研究結果が一致しない理由は、地域性や、能力別グループ編成の有無、教師の管理の度合い

などが影響していると考えられる。(小泉, 1997)。

(3) 小学校環境での適応と中学校環境での適応との関連

小学校環境と中学校環境の適応の関連については、強い結びつきはみられないとの報告があり (Dowling, 1980)、小学校での適応状態が中学校での適応状態を規定する程度はあまり強くないだろう。しかしその一方で、中学校入学前はかなり特徴的な適応上の問題を示す生徒については、入学後の適応に関しても問題が出現しやすいと思われる。

過去および他の環境移行経験の影響として、「ストレス免疫仮説 (stress inoculation hypothesis)」すなわち、過去の好影響を与えるという考えがある (Simmons & Blyth, 1987)。その一方で、負の影響を与えるという考えもある (Crockettら, 1989)。これらは、環境移行の内容や質、注目する適応過程の側面の違いによる。

中学校入学と他の種々の変化 (思春期の身体的変化、住居移動、親の離婚など) が重なった場合、教育課程外の活動への参加、学業成績、自尊感情などが低下した (小泉, 1997)。

日本の帰国児童・生徒では、学校の規則やまじりの厳しさを母親に訴える傾向が強かった (塚本, 1979)。これは、学校の社会的風土の違いに加えて、小・中学校の質的な相違が重複して影響を及ぼしたと考えられる。

4. 仲間関係の種類とその特徴

子どもの仲間との関わりの複雑さは、次の4つのレベルに分けることができる (Hinde, 1987)

(1) 個人 (個人の持つ特性)

(2) 相互作用 (1対1)

(3) 関係 (1対1の安定した関わりのパターン)

(4) 集団 (関係の集まったもの)

(2)~(4)が「仲間関係」といえるものであるが、(2)相互作用は、2人の個人の間である程度持続した社会的やりとりである。それに対して、(3)関係とは、対外に知っている個人間の相互作用の連続から生じる意味、期待、感情など、最小限の社会的組織である。また(2)相互作用と異なり、emotion (愛情や愛着、敵意などの当事者間で典型的に経験される感情) と commitment (関係を続けようとする) を有していると定義することができる。(4)集団になると、互いに互恵的な影響を及ぼしながらやりとりを行う個人の集まりであり、①凝集性 ②階層性 ③同質性を持つ。

友情は、友人との関係の一形態である。友情が成立するためには、①互恵的であること

②愛情のやりとりがあること ③自発的であること の3つの条件が必要である。幼児期から児童期前期 (小学校低学年) では、このような心理的な関係を形成することはできないが、小学校高学年から中学校になると次第に相手の望むものを理解し、精神的な結びつきを備えた友人関係を作るようになる。

5. 友人関係の発達

自己に対する意識が高まるにつれて、友人との関係も単に行動を共にする遊び仲間(「生活の友」)としてではなく、興味や関心を共有する友達(「心の友」)へと変わっていく (小泉, 1992; 和田, 1996; 落合・佐藤, 1996)。友人は単なる遊び友達ではなく、アイデンティティとの結びつきを持つようになる。そして、

友人関係の果たす役割は他の人間関係よりも次第に大きくなり、子どもの心理的社会的発達に影響を与えるようになる。

落合ら（1996）は、大学生が小学校高学年から大学生にいたるまでの同性の友達とのつきあいについて書かれた自由記述を35項目に整理した。その結果、(1)人とのかかわり方に関する姿勢（深い；積極的関与／浅い；防衛的関与）(2)自分がかかわろうとする相手の範囲（広い；全方向的／狭い；選択的）の2つの軸が見いだされた。中学生は、自己防衛的で、友人との間に心理的な距離を置こうとするつきあいをする傾向が見られた。これは、「みんなと同じようにしようとするつきあい方」であるが、「みんなから好かれることを願っているつきあい方」ではない。この時期はまだ自己が確立できておらず、自分に自信が持てないため、ちょっとした批判や刺激にも過敏に反応してしまい、その結果友達に率直に心を開く傾向は見られない。そのため、本音を出さずにまわりに同調しようとするので、閉鎖的や疎外感を持つことが多く、友達との関係がうまくいかないと感じやすい時期である。選択的に友人を見つけて自己開示を行い、積極的に深く関わっていかうようになるのは高校生以降の年齢であるとの結果であった。しかし、中学生の方が高校生よりも自己開示を望んでいるという研究（和田, 1996）もある。

Bigelow（1977）は、親しい友人や友人に期待するものについて質問を行った。7—8歳では友人を具体的に目に見える行動や友人としての適切な態度をとる人としてとらえているのに対して、10—11歳では価値や社会的な理解を共有する人であり、友人に対しては誠実さを期待している。11—13歳になると、

共通した興味を持っていることを望み、自己開示を行ってお互いに理解することを求めている。加齢につれて、友人に誠実さや、自己開示、信頼を求めるようになるようだ（Berndt, 2002）。

友人関係におけるソーシャル・サポートの互恵性とストレス反応の関係を調べたところ、小学生ではサポートの互恵性がストレス反応と有意な関連がなかった（谷口・浦, 2003）。中学生以上の年齢に比べて友人とのつきあいが浅く幅広く、長期にわたる特定の友人関係が築かれにくい。そのため、友人関係における互恵性が重要視されることが少ないようだ。特定の友人関係でのサポートの互恵性がストレス反応と関連を持つためには、(1)個人内の発達段階が進展していること (2)友人関係自体が進展することが必要になる。

しかし、しだいに友人のより親密な知識を所有するようになり、友人との違いや相容れないものを持つ存在として友人関係をとらえるようになる（Berndt, 2002）。友人選択はより多面的な情報に基づいており、安定的・相互的になっていく。

6. 小中移行期の友人関係の特徴

小学校から中学校への移行時期には、卒業や入学という外的な変化により、構成する集団の要因が変わる。中学校入学事態について諸外国の研究では、学校への満足度や適応感が入学時に低下することが知られている（Hirsch & Rupkin, 1987）。中学校入学後も小学校時代からの友人とつきあうことが多いようだ。

一方、日本においては中学校入学を前後の適応感の変化をみると、友人関係を肯定的にとらえる項目について変化がなかった。また、

友人関係を否定的にとらえる項目は7—8年生の方が5—6年生より低得点だった(小泉, 1997)。このことから上位学校への進学という環境移行事態にもかかわらず、肯定的な友人関係は安定しているといえる。これは、青年前期になると友人関係が児童期に比べて個別的・選択的であり、友人関係を作る段階ですでに好ましくないような関係を形成しないようにする傾向が強くなるためではないかと考えられる。

しかし、木村ら(2006)の研究結果によると、中学入学前後の肯定的な友人関係の得点は6年生2月に比べて7年生7月のほうが低下していた。これは友人を級友ととらえているため、中学入学による学校生活の変化に伴ってそれまでの友人関係とは質が異なるためだと考えられる。

中学入学直後の生徒は、小学校の友人との別れにも関心があるため(Eliasら, 1985)、中学校入学前後の生活の連続性や関連性を持たせることが重要である。

友人関係の破綻は、子どもの調整機能に重大な衝撃を与える。友人のいない子どもは孤独であり、仲間によって犠牲になる傾向がある。子ども時代の長続きしない友人関係は、社会的臆病さや、敏感性、社会的スキルの欠如につながる可能性がある。いじめられる子どもや拒否される子どもには、対人関係の希薄さが見られ、攻撃行動やいじめなど否定的な関係結びつきやすい(保坂, 2000)。

青年期の友人関係においては、自身の成長につれて、自分で考え、お互いに満足できるように友達とのつきあい方が変わっていくことが求められる(落合・佐藤, 1996)。その過程においては、ぶつかり、傷つくこともあるし、子どもの頃のように友達にとけ込めな

くなり、友人のつきあい方を悩むこともある。

7. 性 差

友人関係には、性差が見られることがわかっている(Simmons & Blyth, 1987; 和田, 1996; 小泉, 1997など)。男子はスポーツなどをすることが多く、集団が大きい、女子は親密性が高く、自己開示が重要な意味を持つため、友人関係がうまくいかないことに対して敏感である。

そのため、青年前期(6—8年生)においては、女子の方が男子より不適応的であり中学校入学の影響を受けやすい(Simmons & Blyth, 1987)。

特に女子は男子に比べて容姿やクラス内の人気を重視する傾向があり、周囲の評価に対して敏感であるため、友人関係において不適応的な傾向を示すようだ(小泉, 1997)。しかし肯定的な友人関係については、性差はみられなかった。これは、女子は友人を選択するときにすでに好き嫌いが明確であるため、小グループ化しやすいことが結果に反映していると考えられる。

女子の方が男子に比べて、一般的に性的に早熟であり、自我の目覚めも早く、容姿や級友内での人気を重視する傾向が強くなる。これは、自分や周囲の人が、自分に対しておこなう評価に基づくものである。しかし、新しい環境では、このような評価基準が明確ではなく、しかもあまり交流のない級友に評価を委ねることになる。そのため、入学後は不安定な心理状態と結びつきやすいようだ。

8. 小中一貫・連携教育における友人関係

小学校から中学校への移行期を滑らかに接

続するために、近年、小学校と中学校の一貫や連携をおこなうケースが増加している。しかし、これらを実施する際には、児童後期から青年前期の子どもの友人関係の発達や社会性を踏まえる必要がある。

無藤（2007）は青年期の友人関係について「親密な数名の仲間を作り、そこでのやりとりが自己形成の場となり、気持ちの安定の所在ともなる。」と述べている。仲間関係を維持することに気を使い、相手の同調や共感を得るように努力する。さらに、友人関係は自己発達との関連も強く、「様々な自分の異なる面に気づくようになり、その統合の試みが行われる。だが、思春期ではそれは難しく、自分の相矛盾する面の分裂に悩むことも増えていく。その統合を支え促す意味で、大きな集団での共同の経験が意味を持つ。そこに自分を位置づけることが自己の統合を補うことにもなる」（無藤, 2007）ため、不登校など不適応を減らすためには発達の側面について留意した上で、教育を行う必要があるだろう。

小中一貫教育では児童生徒の構成要員が殆ど変化しないため、集団での人間関係が固定化され膠着状態に陥りやすい。しかし、友人関係で悩みやすい時期であることや成熟や発達の個人差が大きいことを考えると、友人選択が幅広くできることが望ましい。クラスのメンバーを換えることが可能になるくらいの学年集団サイズであることが望ましい。

また、友人を多面的に理解したり、発達による変化を認識できるような取り組みの工夫が求められる。授業内の工夫はもちろん行われるべきであるが、それだけでなく行事や課外活動なども友人関係を構築する上で大切である。同年齢とのかかわりだけでなく、他年齢とのかかわる経験により、自分の対人関係

の方略を意識的や客観的にとらえることができる。思いやり行動や共感する経験を通して、友人のいろいろな側面を発見することができる。これらのことが自己肯定感を育てることにつながり、自分自身の成長を実感する機会になるだろう。

引用文献

- Berndt, T.J. 2002 Friendship quality and social development. *Current Directions in Psychological Science*, 11, 7-10
- Bigelow, B. J. 1977 Children's friendship expectations: A cognitive development study. *Child Development*, 48, 246-253
- Blyth, Simmons, & Bush, D 1978 The transition to early adolescence: A longitudinal comparison of youth in two educational context. *Sociology of Education*, 51, 149-162
- Blyth, Simmons, & Carlton-Ford 1983 The adjustment of early adolescents to school transitions. *Journal of Early Adolescents*, 3, 105-120
- Crockett, L.J., Petersen, A.C., Graber, J.A., Schulenberg, J. E., & Ebata, A. 1989 School transition and adjustment during early adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 9, 181-210
- Dowling, J.R. 1980 Adjustment from primary to secondary school: a one year follow-up. *British Journal of Educational Psychology*, 50, 26-32
- Eccles, J., & Midgley C. 1989 State / environment fit: Developmentally appropriate classrooms for early adolescents In R.Ames & C.Ames (Ed.) *Research on Motivation in Education*, 139-181, New York: Academic Press
- Elias, M.J., Gara, M. & Ubriaco, M. 1985 Sources of stress and support in children's transition to middle school: An empirical analysis. *Journal of Clinical Child Psychology*, 14, 112-118
- Feldlaufer, L.M., Midgley, C., & Eccles, J.S. 1988 Student, teacher, and observer perceptions of the classroom

小学校から中学校への移行期における友人関係

- environment before and after the transition to junior high school. *Journal of Early Adolescence*, 8, 133-156
- Fenzel, L.M., & Blyth, D. A. 1986 Individual adjustment to school transitions: An exploration of the role of supportive peer relations. *Journal of Early Adolescence*, 6, 315-329
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97
- Harter, S. 2006 Chapter 9. The Self Handbook of Child Psychology 6th edition, 505-570
- Hinde, R.A. 1987 Individuals, Relationships, Relationships and Culture. Cambridge University Press.
- Hirsch, B.J. & Rapkin, B.D. 1987 The transition to junior high school: A longitudinal study of self-esteem of sixth- and seventh-grade students. *Journal of Educational Psychology*, 82, 117-127
- 保坂亨 2000 学校を欠席する子どもたち 東京大学出版会
- Kenneth H. Rubin, William M. Bukowski, & Jeffrey G. Parker. 2006 Chapter 10 Peer Interactions, Relationships, and Groups. Handbook of Child Psychology 6th edition, 571-645
- 木村文香・加藤美帆・酒井朗 2006 小中移行期における学校適応の変化—パネル調査の分析から— 幼小中の連携教育による児童生徒の問題行動の抑制に関する教育臨床学的研究 (研究代表者 酒井朗) 平成15年度—17年度科学研究費補助金 基盤研究(C) (2) 課題番号15530539 研究成果報告書、91-97
- 小泉令三 1992 中学校進学時における生徒の適応過程 *教育心理学研究*、40、348-358
- 小泉令三 1997 小・中学校での環境移行事態における児童・生徒の適応過程—中学校入学・転校を中心として— 風間書房
- 耳塚寛明・刈谷剛彦・濱名陽子・庄健二 1983 小・中学校における学校生活の変容家庭に関する継時的研究(1) *東京大学教育学部紀要* 23, 77-110
- 文部科学省 2008 平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 (小中不登校) について (8月速報値)
- 無藤隆 2007 幼小連携・小中連携の意義と今後指導と評価 *53 (2)*, 4—8
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 *教育心理学研究* 44, 55-65
- Simmons, R.B., & Blyth, D.A. 1987 Moving into adolescence: The impact of pubertal change and school context. Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter
- 谷口弘一・浦光博 2003 児童・生徒のサポートの互恵性と精神的健康との関連に関する縦断的研究 *心理学研究*、74 (1), 51-56
- 塚本恵美子 1979 帰国子女の適応過程—帰国年齢・経過期間との関連についての母親からみでの調査報告— *東京学芸大学海外子女教育センター紀要* 5, 93-110
- 和田実 1996 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 *心理学研究*、67 (3), 232-237
- 山口剛 1986 児童・生徒におけるストレス兆候と学習成績に対する親・子の意識および態度との関連性について *佐賀大学教育学部研究論文集* 34.1-15
- 山本多喜司・S. Wapner 1992 人生移行の発達心理学 *北大路書房*
- Youngman, M.B. 1978 Six reactions to school transfer. *British Journal of Educational Psychology*, 48, 280-289

追記：

本稿は、国立教育政策研究所「小中一貫教育の課題に関する調査研究 発達班 第1次報告書 第1章理論編第4章友人関係」(2007)及び、「小中一貫教育の課題に関する調査研究 発達班 最終報告書」(2008)に加筆・修正を加えたものである。